

夏目漱石『こころ』を読む—大学生（高校生）のための小説塾—
愛知淑徳大学文学部国文学科教授 小倉 齊

I 文学を「読む」ことの意味

- 1 文学を「読む」＝言語表現あるいは**言葉との対話**。
- 2 2種類の「読み」：
 - ① <解説>：一義的な意味への到達。
 - ② <解釈>：読み手の時間、場所、状況に応じた**新たな意味**の発見→芸術作品は、繰り返し鑑賞されることで、その都度新しい生命を吹き込まれ意味を与えられる。
- 3 <ミメシス=mimesis>（偽物＝似せ物、神の創造物である自然・世界の模倣）としての芸術（文学）→現実世界を模した芸術表現を通して人間は「世界」を知る。
- 4 「読む」行為＝「世界」の構築と「世界」の**秘密**や「人生」の**謎**についての**認識**→「世界」と時代や社会・文化状況との間に脈絡をつける＝言語表現と背後に潜む時代や社会・文化状況との間の<コンテキスト=context（脈絡・関係性）>を考える。

II 文学を「読む」ことで人は何を学ぶのか？

- 1 言語表現が必然的に文化的・社会的・政治的メッセージを持ち、読者に何らかの立場をとるよう誘惑するからくりの解明→自力で「読み」、「考える」トレーニング。
- 2 自力で「読み」「考える」→メディア一般、社会、文化、人間存在の秘密を「読む」ことへと繋がり、事件・事象、人間の生き方を**批評的に見る眼（クリティカル・シンキング）**を養う（三遊亭圓朝演述・若林珪蔵筆記『怪談牡丹燈籠』（1884年、東京稗史出版社）の用字法とリテラシー・当時の言語状況）（*1、資料No.33・34）。

III 文学の「言葉」

- 1 文学の「言葉」：自動化した日常のことばに新たな生命を与え、新鮮なイメージの息吹を甦らせる、あるいは普段見慣れた事物からその日常性を剥ぎ取り、新たな光を与え、**日常性の奥に潜む真実**に気づかせる→<異化=defamiliarization>効果（*2）。
- 2 <異化>作用→日常や現実の奥に潜む謎・真実を**虚構（fiction）**として**昇華・純化（sublimation）**させる（*3）。
- 3 <明示的意味=denotation>：語の文字通りの意味、第一義の意味作用。
<暗示的意味=connotation>：語が連想させる二次的意味作用。
homeの明示的意味は「住む場所」で暗示的意味は「家族・団欒・くつろぎ」など。
- 4 <間テキスト性=intertextuality>：「あらゆるテキストは他のテキストを吸収し変形したもの」（ジュリア・クリスティヴァ）→テキストは常に先行するテキストから何らかの影響を受けている。意識的、無意識的な先行テキストへの言及、灰めかし。
- 5 引用の物語→記憶の想起→記憶が集積された場<トポス=topos>の共有→**新たな物語**の生成（物語の継承）（*4、資料No.35）。「やさしい顔の鬼たちとの出会い」（宇野邦一）。「文を広げて、見ぬ世の人を友とする」（『徒然草』）。

IV <小説>をより面白く「読む」ために

- 1 開かれた作品：「完成され、閉ざされた形としての芸術作品は、同様に**開かれたもの**でもあり、**無数の異なる仕方**で解釈されうる」（ウンベルト・エーコ『開かれた作品』）。
- 2 「開かれた」作品にするために→「**想像力の駆使**」が必要。「言語は記号としてあらかじめ分節化されている限りで、意識の絶えざる流れを直接に再現することはできない。にもかかわらず、文学読書が連続性の仮象を提供しうるのは、読者がめいめいの体験、あるいは文学的教養に根ざした**想像力の駆使**によって、**テキストの空隙を補填するから**」（ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書』）。
- 3 <空白>を「読む」ためにどうするか？→作者の用意した時間配列にしたがって読む、すなわちストーリー（出来事を起こった時間順に並べた物語内容）を追うのではなく、「なぜ？」「どうして？」という疑問を抱き、**プロット**（物語が語られる順に出来事を再編成したもの）を明らかにすることを心がける。
- 4 作品を構成する、言葉・文章・表現、登場人物、挿話、等には、一つとして不必要なものはなく、どんな些細な情報も「読む」手掛かりを与えてくれる。
- 5 常にその作品が生み出された時代背景を意識し、**文化的<コンテキスト=context>**（**関係性・文脈・背景**）を明らかにしつつ「読む」。そのために**日本史・世界史・美術史・映画・音楽・絵画などの知識**を豊富にしておく。

V 「小説」はどのように読めばいいのか？

- 1 読みの試行錯誤の中で確認できること：
 - ① 「小説」とはあくまでも**読者のもの**であり、**読者が意味を作り出すもの**である。
 - ② 読まれ、読み手の頭の中に何らかの意味が生まれにくいことには、それは単なる紙、ないしは紙を綴じたものに過ぎない。
 - ③ 読者は読みながら、小説本文と共に、間接的には作者と共に、**意味を作り出す**。
- 2 **読者**とは、どういう存在か？：読むことを通して**小説の意味を作り出す**存在。
- 3 **小説の意味**を作り出す**読者**とは、どういう読者か？：
 - ① 小説が書かれ、発表された時代の読者、すなわち<同時代読者>。
 - ② <置き換え>作業をすることで<同時代読者>に限りなく近づいた読者。
- 4 <同時代読者>となる為の<置き換え>作業：

当時の貨幣価値とか物価とか、あるいは当時の男女観などを、統計資料や、新聞雑誌の記事、のちの時代からの回想などにより明らかにする＝<**同時代研究**>。

VI 『こころ』を例にした<同時代研究>の実践レッスン—その1—

- 1 **Kはなぜ死んだのか？**：『こころ』の読者にとって避けて通れない難問の一つ。
 - ① Kの自殺までの経緯
 - (1) 自分が間借りさせてもらっている奥さんとお嬢さんの二人だけの家に、先生は養家からも実家からも見放された親友のKを同居させる。その頃までには、**先生とお嬢さん**との関係は、**お互いの気持ちを確かめ合う寸前**のところまで来ていた（*5）のだが、同居を始めてしばらくすると**嫉妬深い先生の目**にはお嬢さんとKとの関係が**普通でないように見え始める**。その時、先生としてはKに自分のお嬢さんへの気持ちを打ち明けても、それこそ結婚を申し込んでもよかったのだが、嫉妬心を持ってあましながらぐずぐずしているうちに、**先にKの方から「お嬢さんに対する切ない恋」**を打ち明けられてしまう。

- (2) 奥さんやお嬢さんにこそまだ告げられていなかったものの、先を越されたかっこうになった先生は、何とかして K の気持ちを打ち砕こうと姑息な手段を講ずる。K の口癖の「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」を逆手に取って、厳しい**精神修養の途上にある K**に、そんなことに気を取られていていいのか、と迫る。K は、「僕は馬鹿だ」と苦しそうにつぶやいたあと、「**覚悟ならぬ事もない**」とぼつりと洩らす。K の気持ちが萎えたと思って一旦は安心した先生であったが、今度は「覚悟」という言葉がひょっとしてお嬢さんの方へとさらに突き進む意味ではないかと不安になり、K には自分の気持ちを知らせぬままに、皆が留守の時、お嬢さんとの結婚を奥さんに申し出てしまう。
- (3) 結局、申し出た後も先生は、自分からは K に報告することもなく、何日かして **K は奥さんからこのことを聞く**ことになる。そのことを先生が奥さんから知らされたのは、K が事実を知った「二日余り」あとであり、**その間、事実を知った K の方も先生に対して何の反応も示さなかった**ことになる。超然としたそのような K の態度に打ちのめされた先生が、彼に対して今さらどういふ態度をとればよいのか考えあぐねていたその夜に、K の自殺は決行される。
- ② 少し長めに経緯を辿る理由：『こころ』中5分の1くらいの分量があり、その中で、**夏前から正月過ぎくらいまでの時間が流れ、主に先生の目を通して、先生の気持ち、K の態度・気持ち、さらにはお嬢さんや奥さんの様子が書き留められる**。特に先生と K の心の動きは、単線的というよりは、矛盾や逆行、揺れもあるといったように錯綜していて、その意味からも最低限、この程度の整理が必要となる。→まず精読し、内容をきちんと整理・把握するところから始めるしかない。
- ③ K の自殺の理由について、掃いて捨てるほどある「感想」や「憶測」のような説。友人に裏切られたから→遺書には、「**自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから**」とあり、**裏切られた云々とは書いてない**。
愚かで自分勝手だった自分に愛想を尽かしたから→決め手不足。
ここで重要になるのが、同時代研究。
K という男はどのような人物であったのか？→小説中の情報からわかること：**精進**に努め、**精神的な向上心**を重視し、**道の実現**のためにはすべてを犠牲にするのも辞さない、しかもそのために、「**成るべく窮屈な境遇に**」いようとする。
- (1) **禪の修業**のような、**苦行僧**のような生き方を目指す K にとって、**お嬢さんに心を動かす**などということは、**自らの生き方を否定するも同然**の行為。
- (2) K のような生き方を同時代の中を探してみると、**明治時代の後半から『こころ』の発表された大正時代にかけては、禪の修業や修養（人格を磨くこと）といったものがブーム**になっていて、K のような生き方は決して珍しいものではなかった。したがって、同時代読者は、K のような生き方に特に違和感を覚えることもなく、受け容れたと思われる。
- (3) 正月も過ぎた頃に先生に「**精神的に向上心のないものは馬鹿だ**」と詰問された時、**K はみずからが愚かだったことに気づき**、自分の中で**軌道修正**を始めたものと思われる。ただし、これだけでは自殺という方向性は出てこない。
- (4) **K の自殺**、あるいは**自分を裁く気持ち**が決定的となったのは、**奥さんから先生の気持ち——結婚の申し出——を聞かされた時**だったと思われる。親友である**先生の気持ちも知らずに自分本位な振る舞い**をしてきた自分自身への**絶望と処罰の念**が、この時固まった。

当時の修養関係の書物類を見ると、異口同音に、「**オレさえよければ人はどうでもよい**」という**利己心こそが最も良くないもの**として、槍玉にあげられている。奥さんを通じて先生の真意を知った K が痛感したのが、良くないものとしての利己心の問題—利己心の奴隷—であり、これに比べれば、女性に心を動かして一瞬道を踏み誤ったなどというのは取るに足らないこと。

- ④ 同時代状況を知ること、当時利己心というものがいかにいけないものとされていたか、まして K のような修業青年が、それに振り回されるなどというのは言語道断であるという当時の常識が見えてくる。

VII 『こころ』を例にした＜同時代研究＞の実践レッスン—その2—

先生における利己心と同時代との関わり：先生もまた利己心にとらわれていた。

- 1 小説の後半は**先生が語る（遺書の）形**を取る→**先生自身のこと**は読者に**十分には見えにくい**→先生が気づいていて、かつ遺書の中に書いても構わないと判断した情報のみで成り立つ→先生の欠点のようなものは自覚していないこともあれば、自覚していても書き記さなかった可能性も大いにある。
- 2 小説の基調の一つである懺悔——先生の犯した過ちや至らなかった点についての記述——は、もっぱらお嬢さんへのプロポーズをめぐる K への煮え切らない対応や不誠実な振る舞いなどに集中、それらをめぐって「卑怯な私」「馬鹿ものでした」といった言葉が連発される。ところが、同時代の状況を踏まえて考えた時、先生の振る舞いには、身勝手とも自己中心的ともとれるような振る舞いや思い込みが多く見られ、しかもそのことへの先生の反省的自覚はほとんど書き込まれていない→それらの部分は先生が語るかたちを取り、**読者は先生の見方に巻き込まれやすい構造**になっている＝先生自身に自覚がないため、その「身勝手とも自己中心的ともとれるような振る舞いや思い込み」が読者に気づかれにくい——先生の考えのほうを正しいと思ってしまう——構造になっている。
- 3 同時代研究によって**先生→読者**という一方通行的認識に楔をうちこむ。
 - ① 先生が K を自分の下宿に同宿させた行為：K が何を目指しているのかをまったく思いやろうとしない**独善的行為**→K は一種の苦行僧的な生き方で自分を磨こうとしており、「成るべく窮屈な境遇」に身をおく必要があった→先生の「**好意**」は**独りよがりの、K にとっては迷惑**以外の何ものでもない振る舞い。
 - ② K が火鉢を「**寒いけれども要らないんだ**」という場面：先生やお嬢さんたちの間では K の偏屈さをあらわす行為としか受け取られない→K は自分を「成るべく窮屈な境遇」に置こうとしていた→先生の情報だけを真に受けるのではなく、同時代の雰囲気基準にすることで読者は、先生たちの独りよがりを対象化できる。
 - ③ 故郷の叔父をめぐる、当時は**妾を置いたり従姉妹との婚約を急がせる、ということ**は**珍しくなかった**にもかかわらず、先生の受け止め方は一方的。
 - ④ K の同宿以前の段階における先生とお嬢さん：日本橋に一緒に買い物に行って帯か反物をプレゼントし、友人間でも二人の関係が噂になり、奥さんやお嬢さんに、**当時の常識からすればもはや先生との結婚は既定の事実であるかのように思わせておきながら、決定的な言葉を避ける**→無責任、無神経、特にお嬢さんには残酷。
 - (1) 『こころ』には、同時代読者や同時代状況を踏まえて読む読者にのみ見えてくる水面下での利己心や利己心批判が数多くある→漱石は**修養の時代の教訓作家**。

VIII 『こころ』を例にした<同時代研究>の実践レッスン—その3—

1 青年の帰郷問題と当時の農村が置かれた状況

- ① 『こころ』は教科書への採録の仕方象徴的に見られるように、もっぱら先生の過去、先生と青年との関係ばかりが注目されてきた（章でいうと〈上〉と〈下〉）
- ② 『こころ』において分量的にも重みを持つ**農村部**→全て**私（青年）の郷里＝農村での滞在**にあてられた〈中〉のみならず、〈上〉にも三節にわたって**私が帰郷する場面**があり、〈下〉では**別の農村を舞台として先生の棄郷事件**が描かれる。
- ③ 〈上〉の帰省部分：青年が帰郷の度に持ち帰る「父にも母にも解らない変な所」が「父とも母とも調和しなかった」（**都会に出た子供と村に残った両親との思想的対立**）→〈中〉における本格的な**父子対立**の伏線としてのみ機能。
- ④ 〈中〉では鋭く顕在化させられる**親子対立**：卒業祝いの会開催の是非をめぐる、大げさなことを嫌う青年に対して父母が「田舎は蒼蠅いからね」「お父さんの顔もあるんだから」と釈明し、その言葉尻を捉えて青年は「つまり私のためなら、止して下さいと云ふ丈なんです。陰で何か言はれるのが厭だからといふ御主意なら、そりや又別です」などと理屈をこねる。それに対する父の答えはたった一言、「学問をさせると人間が兎角理屈つぼくなつて不可ない」→この問題はやがて、**卒業後の居所**というきわめて具体的で切実な問題へと発展。

「子供に学問をさせるのも、好し悪しだね。折角修業をさせると、其子供は決して宅へ帰つて来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ」

学問をした結果兄は今遠国にゐた、教育を受けた因果で、私は又東京に住む覚悟を固くした。斯ういふ子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかつた。永年住み古した田舎家の中に、たった一人取り残されそうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた。（〈中〉の七）

- ⑤ **学問に起因する対立は卒業後の居所問題、老親の世話という問題**に変奏、発展。
父の死が遠くに見えていた時には問題はなかつたが、いよいよそれが差し迫つたものとなり、母の世話をめぐって兄と具体的な相談という段階になると、兄弟の利害は鋭く対立。「御前此処へ帰つて来て、宅の事を監理する気はないか」ともちかける兄に対し「土の臭を嗅いで朽ちて行」くのには堪えられない青年が「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と反論。さらにそれに対して兄が「おれにそんな事が出来るものか」と言い返す。この問題は極めて重く、解決困難で、青年が東京への車中の人となるところで問題に関する時間が停止する。
- ⑥ 同時代の状況を知る手がかりとしての**唱歌「故郷（ふるさと）」の誕生**（『こころ』発表（大正3年（1914）4月20日～8月11日、東京・大阪「朝日新聞」）と同年、**<うさぎおーいしかのやま、こぶなつりしかのかわ>**）：農村をめぐる問題はきわめてホットで、火急の問題。当時、農村では急速に進んだ大地主化によって自作農が小作へと転落し、貧困の挙げ句に都会に出て行っても、そこでも同様に産業革命がもたらした人余り現象による失業と貧困とが待っているという状況。何とか**農村を魅力あるものにし、彼らをそこに踏み止まらせることが重要**視されていた。あらゆる論者が農村の活性化を説き、そのためにも有為の人材の農村への帰住・定着を熱望。農村生活の美化、安らぎと癒しのふるさとのイメージ醸成への動き。
- ⑦ 『こころ』の「農村問題」：世の中全体をおおいつくしていた**〈帰郷のすすめ〉** 圧力を大学卒業直後の青年ははねのけることができるのか？

IX 同時代研究（置き換え作業）を踏まえた解釈以外の分析方法

- 1 同時代研究による小説理解の深化や正確な意味確定は、同時代読者と同じスタートラインに立てたことを意味するに過ぎない。常に要求される、**同時代への想像力**。
- 2 読書行為を構成する要素。
作者が工夫して仕掛けておいたもの：「原因」「仕掛け」。
読者が反応して受け取る何らかの感じ：「効果」「結果」。
- 3 読者は「効果」は感じ、受け取るが、その「原因」までは考えない。
『こころ』の読者が**直接先生から語りかけられているような感じ（「効果」）**を持ったとすれば、そこには当然「原因」があるはず→**一人称文体**であるということ、**遺書**というかたちで作中に実在するという、**青年が受け取って読み始めているかのように書かれていること**→**本物らしく感じさせ、遺書を読まされているように感じさせる仕掛け（リアリティ＝現実らしさ）**。
- 4 「効果」から遡行してその原因となった「仕掛け」を明らかにするか、方向を逆にして、先にどのような仕掛けが全体に張りめぐらされているかを点検し、そのそれぞれがどのような効果を生み出しているのかを考えるか？ ⇨小さな仕掛けがちりばめられている場合が多く、**「仕掛け」を先に洗い出していく**ことが有効。
- 5 小説には全体としてどんな仕掛けがあるのか？——仕掛け・特徴の洗い出し——
◎人称（* 6 * 7） ◎視点（* 8） ◎時間構成 ◎比喻 ◎文体 ◎擬音・擬態語
◎地の文への手紙の引用 ◎特定記号の使用 ◎会話と地の文の関係（* 9）
◎特定語彙への偏りの有無（キイ・ワードの特定） ◎視覚聴覚等の感覚への依存度
- 6 小説の全体を精読し、内容をきちんと整理・把握することが、考えるための大前提。

X 『こころ』をどう読むか

- 1 従来の読まれ方：
三角関係のもつれ→恋敵「K」の自殺→「先生」の懺悔及び罪意識ゆえの自殺
- 2 『こころ』の中心は「先生」の遺書にあるのか？
- 3 「先生」の遺書は「先生」が書いたままの形の再現なのか？
- 4 遺書の末尾をどう読むか？
- 5 遺書を受け取った「私」はなぜ「先生」の言葉を裏切り、いつ遺書を公開したのか？
- 6 冒頭で「よそよそしい頭文字などはとても使う気にならない」<上1>と記した理由はなにか？
- 7 初めての出会いで「先生」が「どこかで見た事のある顔のように思われ」た理由は？
- 8 「先生」が「私」に人間を信用しなくなった理由を説明しようとした時、襖の陰から「あなた、あなた」と二度声をかけた「奥さん」の真意は？
- 9 「私」が「奥さん」と初めて「二人差向いで話をする機会に出合った」<上十>と二度目の「差向い」で話をした時<上十六～二十>の違いは何か？
- 10 「私」が箱根から貰った絵端書や日光から貰った「紅葉の葉を封じ込めた郵便」は誰が送ったものか？
- 11 「奥さん」は真相をどこまで知っていたのか？

* 1 : 文学テキストにおける「本文」の問題：**テキスト生産**ということを文学テキストの印刷、出版、流通過程の中でとらえる。

『怪談牡丹燈籠』というテキスト：噺家三遊亭圓朝が高座で**演述**した怪談を、速記者の若林珮蔵と酒井昇造の二人が**速記**し、東京稗史出版社から中本形式、前13巻の分冊形式で**出版**。テキストによる漢字表記の違い、振り仮名（ルビ）の仮名遣いの違いはあるが、音読すればすべて同じ文章→**文章のアイデンティティー（同一性）は音読する声**によって保証されている。圓朝の口演を速記したわけだから当然。ただし確認しておきたいことは、この物語における**本文はむしろルビの方にある**という点。普通漢字仮名交じり文にルビを付けた文章に接した場合漢字仮名交じり文を本文として扱い、ルビは補助的仮名文字として扱いがちだが、この物語の場合、**ルビが本文で漢字はルビに相当する宛て字**。酒井昇造の回想「日本速記大家経歴談」（『日本速記雑誌』1911・11）によれば、宛て字は若林、酒井の二人が付け、文章化したものを『郵便報知新聞』の記者に添削してもらったという。この文章の作者は4人。別の観点で見ると、話し言葉に漢字を宛てるということはその言葉に解釈を加えるということになる。AとB・Cで違った表記がなされ、圓朝の語りに対する理解が微妙に異なっていることがわかる＝読者の識字（リテラシー=literacy）に関する編集者の認識の違いが反映＝編集者が想定する読者層（リーダーシップ=readership）もテキスト生産に関わる。ルビの機能も現在と異なる＝現在では漢字の規範的な訓み方を示すときにルビを振ることが多いが当時は深層的な意味、テキストの文脈に即した深層の解釈に基づく一回限りの話し言葉と漢字の対応という場合も多かった（「言行表裏奴（くちほどでもないやつ）」）。ルビを利用して漢字の読み方や意味を教える方法＝**漢字のリテラシーを増大させる仕掛け**？

- * 2 : **異化効果のある文章を読む**→現実を見慣れないもののように感じはじめる。
小説に書かれていた**擬似現実＝普段の現実とはかけ離れたもの**→現実の見方の変容→**現実の虚構化（fiction）＝現実が虚構に昇華（sublimation）される。**
- * 3 : **subliminal** : 識閾下の、潜在意識の、潜在意識に印象づける
- * 4 : **思い出す**＝ある出来事の正確な記録にアクセスするというよりも、むしろそれを**再構成する**ような——**物語を語る**ような——ものである。
- * 5 : 「先生」と「K」の同居以前に成立している奥さん・お嬢さん・「先生」の関係性
 - ① 戦争未亡人と一人娘の家に引っ越す「先生」<下十>
未亡人は私の身元やら学校やら専門やらについて**いろいろ質問しました**。そうして**これなら大丈夫だということ**をどこかに握ったのでしょ、いつでも引っ越して来て差支えないという挨拶を即座に与えてくれました。
 - ② 宅中で一番好い室をあてがわれる「先生」<下十一>
私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは**宅中で一番好い室**でした。本郷辺に高等下宿といった風の家がぼつぼつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得ていました。**私の新しく主人となった室**は、それらよりもずっと立派でした。移った当座は、学生としての私には過ぎるくらいに思われたのです。
 - ③ 家族同様の扱い<下十三>
私はだんだん家族のものと接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談を云うようになりました。茶を入れたからと云って向うの室へ呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って来て、二人をこっちへ招いたりする晩もありました。（中略）**三人は顔さえ見ると一所に集まって、世間話をしながら遊んだ**のです。

④ 国元の事情を何もかも話した後の奥さんの反応と「先生」の疑心暗鬼<下十五>
奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。(中略)
ところがそのうちに私の猜疑心がまた起って来ました。(中略)私はどういう拍子
かふと奥さんが、叔父と同じような意味で、お嬢さんを私に接近させようと力め
るのではないかと考え出したのです。すると**今まで親切に見えた人が、急に狡猾
な策略家として私の眼に映じて来た**のです。

⑤ お嬢さんの気に入るような帯か反物を買ってやろうと、三人で日本橋三越へ
結婚が決まったのかと級友の一人に見られ、調戲われる。<下十七>
さっきまで傍にいて、あんまりだわとか何とか云って笑ったお嬢さんは、いつの
間にか向うの隅に行つて、**背中をこっちへ向けて**いました。私は立とうとして**振
り返った時、その後ろ姿を見た**のです。後ろ姿だけで人間の心が読めるはずが**あ
りません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当がつきま
せませんでした**。お嬢さんは戸棚を前にして坐っていました。その戸棚の一尺ばかり
開いている隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらし
かったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見つけ出しました。
私の着物もお嬢さんの着物も同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何とも云わずに席を立ちかけると、奥さんは急に改まった調子になって、私
にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解
らなほど不意でした。それが**お嬢さんを早く片付けた方が得策だろうか**という意
味だと判然した時、**私はなるべく緩くならの方がいいだろうと**答えました。奥さん
は**自分もそう思うと**云いました。

**奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなけ
ればならない事になりました**。(中略)私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さん
に頼んだのです。ところが**奥さんは止せと**云いました。私には連れて来なければ
済まない事情が充分あるのに、止せという奥さんの方には、筋の立った理屈は
まるでなかったのです。だから私は私の善いと思うところを強いて断行……。

* 6 : **主人公が「私」として語る場合 (I-as-hero)**、物語は主人公の行動や反応を通して
劇化され、主人公は事件に対して自分なりの限られた判断を下す。そして読者は主人
公の知識の及ばない点を補って読むことができる。

* 7 : **一人称による回想的手記形式**であることの意味①一人称＝基本的には読者の物語内
への介入を容認しにくい人称。②手記を書きつつある時間と手記を書きつつ変容す
る<私>、手記に書かれる様々な過去の<私>＝書かれることで変容していく過去の
<自己>像。

* 8 : 単一人物の視点を三人称で語る場合、**視点そのものは半ば内的、半ば外的**である。
長編小説の場合は複数人物視点の方が適している。

* 9 : 直接話法と間接話法をどう使い分けるかは語り手のスタンスに関わる。**言葉を引用す
るように見せる手法と、地の文に溶かしていく手法とは、語り手の存在感や物語の
進行の速度などによって決定される。語り手の発話と登場人物の発話とが混じり合
った (自由間接) 話法も存在する。**